

奥性のある住宅

指導教員 吉松秀樹 教授 印

OBEB3217 野川 栞里

1. 問題意識

宅地開発により整備された街路は四方からの通り抜けや回遊が可能で奥性が感じられなくなり住民が顔を合わせる機会が少なくなっている (Fig.1)。



Fig.1 グリッド化された住宅街

2. 谷戸空間

谷戸とは丘陵地が浸食された谷状の地形で、一本道で通り抜けができない路地によって住民だけのプライベートな領域をつくりだしている。そこには奥性があり、住民同士のコミュニティを強めている (Fig.2)。

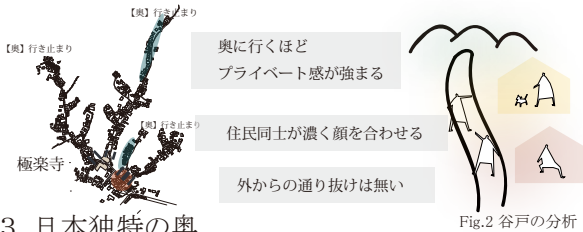


Fig.2 谷戸の分析

3. 日本独特の奥

山自体を信仰の対象とする宗教形態があり (Fig.3)、普段人の行かない山奥に奥宮を置くことで、見えない位置に重要なものを存在させる形式が確立した (Fig.4)。

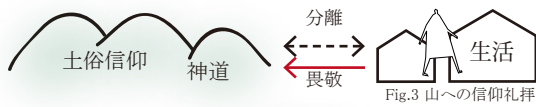


Fig.3 山への信仰礼拝



Fig.4 奥宮の配置

4. 奥を感じる要素

奥はプライベート感の強い空間であり、フィルターをいくつか抜ける・先が見えない道・高低差があることでその先に奥という空間を感じる (Fig.5)。



Fig.5 奥を感じる要素

5. 奥を感じる住宅

一本道においてフィルター通り抜ける行為を繰り返すという手法を用いてグリッド化された街路に奥性を取り戻し (Fig.6)(Fig.7)、住宅の中に道を通して生活感を滲ませることで、自分たちの道だという認識や敷地への愛着・意識を持たせる (Fig.8)。このようなプライベート空間の積み重ねにより、住民の連帯感を強める (Fig.9)。

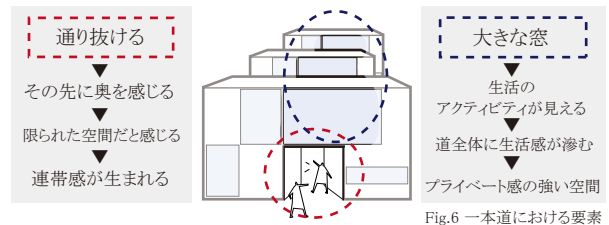


Fig.6 一本道における要素



Fig.7 樹木による奥性

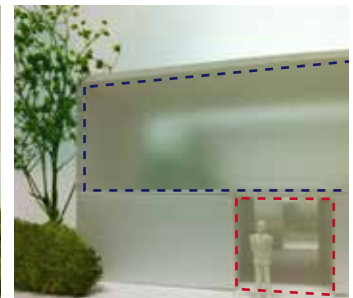


Fig.8 生活が滲む道

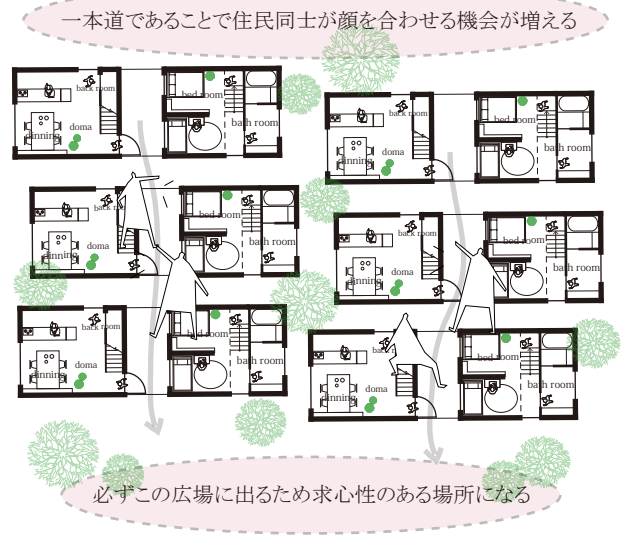


Fig.9 奥を感じる要素の積層